# 教材研究と教材の扱い方（18）

## ――「永久欠番」（中島みゆき）――

菅原敬三

### 一

中学校国語教科書所収の教材「永久欠番」（中島みゆき）（2東書　国語901）を取り上げる。本文は次のとおりである。

永久欠番　　中島みゆき

どんな立場の人であろうと
いつかはこの世におさらばする
たしかに順序にルールはあるけど
ルールには必ず反則もある
街は回ってゆく　人一人消えた日も
何も変わる様子もなく　忙しく忙しく先へと
（第一連――筆者、注。以下同）

百年前も百年後(あと)も
私(わたし)がいないことでは同じ
同じことなのに
生きていたことが帳消しになるかと思えば淋(さび)しい
街は回ってゆく　人一人消えた日も
何も変わる様子もなく　忙しく忙しく先へと
かけがえのないものなどいないと風は吹く　（第二連）

愛した人の席がからっぽになった朝
もうだれも座らせないと
人は誓(ちか)ったはず
でも　その思い出を知らぬ他人が平気で座ってしまうもの
どんな記念碑(メモリアル)も雨風にけずられて崩(くず)れ
人は忘れられて　代わりなどいくらでもあるだろう
だれか思い出すだろうか
ここに生きてた私を　（第三連）

百億の人々が

忘れても　見捨てても
宇宙の掌の中
人は永久欠番
宇宙の掌の中
人は　永久欠番　　（第四連）

出典は、アルバム「歌でしか言えない」である。中島みゆきはシンガーソングライターとして著名でありわざわざ紹介するまでもあるまい。教科書の著者の説明として「一九五二（昭和27）年、北海道生まれ。シンガーソングライター、小説家。著書に「海嘯」「2―2」などがある」とある。

## 二

本文を一般的な詩として読むことは可能だが、本来歌詞として作成されたものであり、作者の主張を歌詞だけを頼りに読むには当然限界がある。歌と共に味わってこそ、作者のメッセージが伝わってくる。本来そういう味わい方をするべきものであろう。

しかし、この作品を一般的な詩として読んだとしても、深さを味わうことが可能であり、完成度も高い。内容的には、人間の尊厳性についてのメッセージであり、人間全てに対する応援歌となっている。中学校の生徒にとっては難度の高い作品ではあるが、人間に対する応援歌を歌い続ける「中島みゆき」という歌手のイメージが重なって、効果的なメッセージとなって受け取られるであろう。

本文は四連構成であるが、第四連だけが人間そのものに注目して独立している。第一連から第三連までは、社会と人間が述べられている。全体的には、社会と人間の二項対立という構造である。

＊

第一連から第三連まで注目すると、作者の意図が見えてくる。個人と社会の関係である。第一連から順次見ていくことにする。

どんな立場の人であろうと
いつかはこの世におさらばする
たしかに順序にルールはあるけど
ルールには必ず反則もある

ここで述べられているのは、個人（人間）の宿命である。個人（人間）の人生は立場に関係なく、また死に行く順番に違いはあっても、死んでいくという法則は変わらない。この個人（人間）の特性を踏まえた上で、もう少し社会の中に個人を当てはめるとどうなるか、それが第二連で示さ

れる。

百年前も百年後(あと)も
私(わたし)がいないことでは同じ
同じことなのに
生きていたことが帳消しになるかと思えば淋(さび)しい

社会の中では、個人の存在の価値が薄れていく寂しさを歌っている。

個人の価値を第二連以上に、広く具体的に社会の中に当てはめるとどうなるか、第三連は次のように歌う。

愛した人の席がからっぽになった朝
もうだれも座らせないと
人は誓(ちか)ったはず
でも　その思い出を知らぬ他人が平気で座ってしまう
もの

自分の生の中で死に注目し、自分の立場からそれを見ると、存在自体が消えていくことに寂しさを覚える。自分の価値は自分が一番分かっているからである。人生の中で味わった喜びも苦しみも仕事に対する情熱も、また他人との関わりもぶつかりも、全てその価値は理解している。しかし、他人から見るとよほど故人との関係が深い者でなければ、自分が覚えるほどに彼らが寂しさを覚えることはない。普通の付き合いでしかない相手ならば、その人の死はさほど大きなものではない。個人間の付き合いとはそんなものだと述べる作者の人間観は炯眼と言ってよい。このように付きつけられると、我々は頷かざるを得ない。

一方、社会から個人を見るとどうなるか、第一連から第三連を見ると、次のようになる。

街は回ってゆく　人一人消えた日も
何も変わる様子もなく　忙しく忙しく先へと（第一連）

街は回ってゆく　人一人消えた日も
何も変わる様子もなく　忙しく忙しく先へと
かけがえのないものなどいないと風は吹く　（第二連）

どんな記念碑(メモリアル)も雨風にけずられて崩(くず)れ
人は忘れられて　代わりなどいくらでもあるだろう
だれか思い出すだろうか
ここに生きてた私を　（第三連）

社会の特性を実にみごとにとらえている。「街は回ってゆく／人一人消えた日も／何も変わる様子もなく／忙しく

忙しく先へと」、また個人で「かけがえのないものなどいない」のであり、「どんな記念碑(メモリアル)も雨風にけずられて崩(くず)れ／人は忘れられて／代わりなどいくらでもあるだろう／だれか思い出すだろうか／ここに生きてた私を」。

授業では第一連と第二連で「街は回ってゆく／人一人消えた日も／何も変わる様子もなく／忙しく忙しく先へと」が繰り返されていることに注意をしなければならない。そして、第二連に「かけがえのないものなどいないと風は吹く」が付け加えられ、第三連でより広い視野から「どんな記念碑(メモリアル)も雨風にけずられて崩(くず)れ／人は忘れられて／代わりなどいくらでもあるだろう／だれか思い出すだろうか／ここに生きてた私を」と述べられている。繰り返しによる強調と視野の広がりに注意した展開が求められる。なぜ広げているのかという問題である。

社会が個人に執着しないのはなぜか。社会の冷酷さを写しているように見えるが、これが社会の特性である。これも十分押さえておきたい。

社会を支配しているもの中には「時間」がある。社会が一人の死への悲しみに割ける時間は少ないのであり、時間の流れとともに生き残った人間は社会生活を営まなければならない。それが社会というものであり、社会に存在している以上、どの人物にも避けて通ることができない社会の特性である。

詩の流れからすれば、社会の冷たさが浮き彫りにされるが、一方でそのようになってしまう社会の特性も押さえておきたい。

この流れを踏まえた上で第四連がある。

百億の人々が
忘れても　見捨てても

自分が生きていく上で「百億の人々」と出会うこともなく、自分のことを「百億の人々」が知っているということもない。自分の周囲にいる人々の延長に「百億の人々」が出てくるのである。当然のことながら、地球上に「百億の人々」が存在するわけでもない。社会の特性を踏まえた上で誇張された表現である。この誇張表現はもっと発展して「宇宙の掌」となる。

宇宙の掌の中
人は永久欠番
宇宙の掌の中
人は　永久欠番

個人の尊厳に注目すれば、〝自分とは宇宙の中で唯一絶対の存在〟であることを主張している。そこには顔の造形

や能力の有無、出自の優劣、身体的な優劣などの条件は一切影響しない。だからこそ「個人の尊厳」なのである。

歌であり、歌詞であるからという条件もあるだろうが、「宇宙の掌の中／人は永久欠番」が繰り返される。当然強調表現であるが、最終行で「人は　永久欠番」と一字空きのところにも留意したい。歌詞だけでも完成度の高い作品と前にのべたが、こういうところにも作者の細かい配慮が働いている。作者の主張と表現の工夫との関係も押さえておきたい。

## 三

右の教材研究を踏まえて、教材の扱い方を考えたい。全体は二～三時間扱いであろう。教材観、指導計画、板書計画、発問計画の試案を考えてみたい。

**[教材観]**

我々は、日常、人生の終末までの視点で、「社会と個人（自分）の関係」をどれほど考えて生活しているであろうか。日々の忙しさに目が行き、それらを意識して生活をしていない。自分に課せられたノルマの消化に、仕事の成否に、人間関係の渦の中で時間を消費していく。そして、人生を終えていく。それが人生と認識している。多くの場合、自分の価値が、仕事の成功、地位、財産の有無などによって決定され、人生の総括がなされていく。

そこに目を向け、時間を止めて正視し、社会を、自分を見つめてみようとしたのが、中島みゆきの「永久欠番」である。

中学校の教材として採録された価値は、将来社会人として巣立たなければならない生徒に、人間の尊厳性とは何か、社会と個人とはどういう関係にあるのかを考えさせる点に認められよう。作者のメッセージを、どれだけ生徒に実感させられるか、十分に留意した授業を試みたい。

本文は、社会と個人とが二項対立として構成されており、そのことは作者のメッセージを理解する上で、構成の意図とともに押さえておかなければならない。加えて、リフレイン、視野の拡大、連の関係、最終連の効果なども押さえておきたい。

**[指導計画]**

第一時　詩を通読し、作者の主張を捉えるために、二項が対立されて表現されていることを理解させる。

第二時　「社会と個人」の二項対立に注目させ、各連における社会と個人の特性を捉えさせる。

第三時　「社会と個人」と特性を理解した上で、生徒自身の「人間としての尊厳」を認識させ、社会で生

きることの意味を考えさせる。

**【板書】** ―― 構造化したものを示すが、これだけの字数を板書することは不可能である。詩であるだけに視写させたい。全文を写すためには板書と同じプリントを用意するのも一案である。

永久欠番　　中島みゆき

三連
でも、その思い出を知らぬ他人が平気で座ってしまうもの
どんな記念碑も雨風にけずられて崩れ人は忘れられて
代わりなどいくらでもあるだろう
だれが思い出すだろうか　ここに生きていた私を

二連
街は回っていく　人一人消えた日も
何も変わる様子もなく　忙しく忙しく先へと
かけがえのないものなどいないと風は吹く

一連
街は回っていく　人一人消えた日も
何も変わる様子もなく　忙しく忙しく先へと

**「時」が支配する。留まることは許されない**

**街（社会・世の中）** ―― **一人ひとりの存在に注目しない**

**私（一人ひとり）** ―― **私が「私」を見る**

**（社会がら自分を見る）** ―― **ちっぽけな存在**

一連
どんな立場の人であろうと　いつかはこの世
におさらばする

二連
百年前も百年後も　私がいないことでは同じ
同じことなのに　生きていることが帳消しに
なるかと思えば淋しい

三連
愛した人の席がからっぽになった朝　もうだ
れも座らせないと
人は誓ったはず

四連　（自分が自分を見る＝評価する）――
偉大な存在・かけがえのない存在

百億の人々が
忘れても　見捨てても
宇宙の掌の中
人は永久欠番
人は　永久欠番

言語事項
比喩　――――　街は回っていく
宇宙の掌の中
一時空きの表記　――　人は　永久欠番

＊課題①　各連の内容の構造はどうなっているか

＊課題②　作者のメッセージを、我々はどのように受け止めるか

【発問】（主要な発問を考えたい）

第一時

T1　今日から三時間をかけて、中島みゆきの「永久欠番」を扱います。「永久欠番」という意味が分かりますか。分からない人は、プロ野球の元巨人軍の長嶋茂雄監督のことを思うと分かると思います。その人の名誉のために、その人が付けていた背番号を永久に他の人が付けられない。その番号を永久欠番といいます。長嶋茂雄の場合は3番です。

では、この詩に込められた作者のメッセージとは何か。それが我々にとって、どういう意味があるか、また、我々にどういう影響があるか考えていきます。

T2　第一時間目の今日は、作者がメッセージを効果的にするために、二つのこと（項目）を対比的に述べています。二項対立といいます。それを見つけてください。簡単には見つかりませんよ。時間をかけてみつけてください。自分の答えを見つけたら、隣の人と相談してください。ここは、個人個人が個別の判断でいいとはいきません。統一した答えにしたいと思います。では、作業にかかってください。

T3　色々と言葉が出たようですが、意味が同じであればいいので「私（一人一人）」と「街（社会、世の中）」としましょう。板書しておきます。二項

対立ですから真ん中に書きます。「街」に関わることはその右に、「私」に関わることはその左にまとめていきます。では、各連から作業にかかってください。

第二時

T1　今日は、昨日の作業を基に精しく整理していきます。その作業を通して、「街」と「私」の持っている特性を考えます。昨日問題になりました第四連は「私」の方に位置しますから、「私」の方に書きましょう。

T2　第四連を「私」の方に位置づけると、もう一つ大切なことが出てきます。自分自身を見る視点が二つに分かれるのです。それも考えてください。

T3　そうですね。「社会から自分を見ること」と「自分から自分を見ること」ですね。「自分が自分を見る」ということは、「自分で自分を評価する」ということになりますから、そのことも板書しておきましょう。

T4　では、以上の点を考慮して「街」と「私」の項目を第一連から第四連を通して整理していきましょう。第四連以外は、各連で「街」の視点と「私」の視点がありますから、それを区別してまとめてください。

第三時

T1　今日は、各連の構造と「街」と「私」の特性をまとめましょう。それを踏まえて作者のメッセージをとらえます。そのメッセージを、我々はどのように受け止め、社会認識をどのように深めていくか、その課題を考えます。

T2　「街」の特性として、「一人ひとりの存在に注目しない」ということがありますが、その理由を考えることも重要です。

T3　「私」の立場から見ると、「街（社会）」は冷たいと映りますが、一人ひとりを大切にしないと映るのは、なぜだと思いますか。

T4　そうですね。社会には「時間」が支配していて、個人の事情をいつまでも考慮することは不可能なのですね。社会が必然的に持っている特性と言えます。

一方、社会から自分を見ると、「ちっぽけな存在」であっても、自分を自分で評価すると、第四連でまとめられているように「かけがえのない存在」といえます。そのことを我々はしっかり認識しておかなければなりません。

T5　以上、作者のメッセージを各連の構造、対比

関係、人間に対する深い認識をとらえました。その上で、我々が社会の中でどのように生きていくかが問われています。それを考えていきましょう。すぐに答えや心構えなどが見つからなかったり、できないかもしれません。でも、今の段階でも考えることは必要です。遠い将来、例外なく社会人として生きていかなければなりません。社会と自分を見つめる目を育てましょう。